

平成26年度購入文化財一覧

【京都国立博物館】(計5件)

- 1 ○種 別 <絵画>
○名 称 仏涅槃図(ぶつねはんず)
○作 者 等 不詳
○時 代 平安時代～鎌倉時代(12～13世紀)
○品 質 絹本着色
○員 数 1幅
○寸 法 等 縦99.0cm、横67.6cm
○作品概要 年新たに発見された、絹本着色2副1鋪の小型の仏涅槃図。図像的には、応徳3年(1086)の和歌山・金剛峯寺蔵仏涅槃図と共通する要素が多い。月及び叢雲に銀泥を刷く点は、12世紀後半の感覚をよくとどめると言える。一方、釈迦に見られる明度の高い色彩感覚は、新しい感覚を見せる。よって、本図の制作年代は、12世紀末から13世紀前半を想定すべきものと推測される。本図の最大の特徴は、その小型の法量である。仏涅槃図でこのような小型のものはこの時期には非常に珍しく、本図は十二世紀に文献上確認される小規模な涅槃講で使用されていたと推測される。藤末鎌初の作品が発見されること自体が貴重であり、仏教史的な意義も高い作品である。

○購入金額 129,600,000円



(仏涅槃図)

- 2 ○種 別 <絵画>
○名 称 鍾秀斎図(しょうしゅうさいず)
○指 定 重要文化財
○作 者 等 祥啓(しょうけい)筆
○時 代 室町時代(16世紀)
○品 質 紙本墨画
○員 数 1幅
○寸 法 等 縦78.7cm 横27.6cm
○作品概要 鎌倉建長寺第百六十四世で文筆僧としても有名な玉隠英瑛(一四三二～一五二四)と、円覚寺第百四十七世を務めた子明紹俊(?～一五三六)の賛をもつ山水図である。筆者の祥啓(生没年不詳)は建長寺の画僧で道号は賢江、職階は書記であった。文明十年(一四七八)画の修行のために上京し、幕府の唐物奉行・芸阿弥(一四三一～八五)に師事すること三年。帰郷するにあたり、そのはなむけと修了証書の代わりとして、芸阿弥から「観瀑僧図」(根津美術館蔵)を描き与えられたことも知られる。祥啓の山水図にはやはりその芸阿弥の画風にならう厳格な楷体描写をとるものが多いが、本図ではむしろ柔和な筆遣いを駆使することによって、平明かつ瀟洒な雰囲気醸成している。

○購入金額 64,800,000円



(鍾秀斎図)

- 3 ○種 別 <金工>
○名 称 七宝唐花文手付盆(しっぽうからはなもんでつきぼん)
○時 代 江戸時代(18～19世紀)
○品 質 銅・七宝
○員 数 1口
○寸 法 等 縦24.9cm 横40.5cm 高16.5cm
○作品概要 アーチ状の取手と花先形の小脚をもうけた銅製の盆に有線七宝を施したものの。見込みを斜めに二分割する片身替の構成や、変形の菊桐紋を各所に散らすなど、その意匠と図様構成に明らかな日本的感性が見られる。その一方で、図様の中で最も大きく描かれた如意頭形八弁唐花文や捻十弁唐花文に中国的な要素の混入を認める。本品は明時代の七宝を参考に江戸中期の日本の工人によって製作されたものであると考えられる。これほどまでに大型で、状態の良い江戸時代の七宝盆は大変珍しく、日本的要素と中国的要素を取り混ぜた作例として江戸時代の七宝を代表する作品である。加賀藩家老横山家の旧蔵品。

○購入金額 7,000,000円



(七宝唐花文手付盆)

- 4 ○種 別 <漆工>
 ○名 称 千鳥蒔絵手箱（ちどりまきえてばこ）
 ○時 代 室町時代（15世紀）
 ○作 者 等 不詳
 ○品 質 木製 漆塗 蒔絵
 ○員 数 1合

○寸 法 等 縦 30.8cm 横 24.2cm 高 16.4cm

○作品概要 隅丸長方形、甲盛、塵居、胴張、畳付を面取とし、錫縁をつけた合口造の手箱。黒漆地に無数の千鳥を金研出蒔絵で散らし描いた後、淡い平目地を作り、蓋裏には同技法で浜松に千鳥を描く。内部には七宝花菱地に菊花文様を唐織で表した錦を貼る。東京国立博物館所蔵の千鳥蒔絵手箱によく似るが、本品は千鳥の数がより多く、東京国立博物館の手箱の蓋裏が外面同様の千鳥散らしであるのに対し、本品は、波に囲まれた土坡に松が伸びる景色の中に千鳥を舞わせる点が異なる。中世の手箱の貴重な例である。

○購入金額 16,000,000円



（千鳥蒔絵手箱）

- 5 ○種 別 <漆工>
 ○名 称 胡蝶扇面蒔絵硯箱（こちょうせんめんまきえすずりばこ）
 ○作 者 等 不詳
 ○時 代 江戸時代（17世紀末～18世紀）
 ○品 質 木製 漆塗 蒔絵
 ○員 数 1合

○寸 法 等 縦 23.8cm 横 22.0cm 高 4.6cm

○作品概要 隅切方形、面取、被蓋造の硯箱。円形銅製鍍金の水滴と方形硯を仕込んだ下水板1枚と懸子1枚を納める。梨地に金銀平蒔絵、研出蒔絵、金銀切金、銀鋳、描割、針描、付描などの諸技法で3本の扇を表す。扇面のうち1面は菊の咲く殿舎の庭、1面は金銀の瓶子と「その・秋まつむし」の文字を散し『源氏物語』「胡蝶」の帖の「花園の胡蝶をさへや下草に秋まつ虫は疎く見るらむ」の歌意を描く。見込に「道甫作」と読まれてきた蒔絵銘があるが、二文字目は「秋」の字のように見える。読み方の結論は出ていないが、文様、技法とも、五十嵐派の特徴を示す入念作であり、江戸時代中期の五十嵐派の動向を探る上で、またとない研究資料でもある。

○購入金額 5,000,000円



（胡蝶扇面蒔絵硯箱）